

ハラホリンにおける社会主義的近代化

著者	小長谷 有紀
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	115
ページ	5-15
発行年	2013-11-29
URL	http://doi.org/10.15021/00008928

ハラホリンにおける社会主義的近代化

小長谷有紀

ここでいうハラホリンとは、モンゴル国ウブスハンガイ・アイマグ（アイマグの原義は集団をさすが、行政区の場合は以下、県と略す）のハラホリン・ソム（ソムは行政決定権をもっているが、便宜上、以下、郡と略す）を指している。この行政区は、モンゴル国公文書館にある文書によれば、1956年の閣僚会議議決により国营農場としての設立が決定されており、行政区の変遷を整理したソドノムダグワによれば、1959年にほぼ現在の地区が構成された（Sodonomdagva 1998：482）。アタルと略称される農業開発運動（1959～65年）の本格的な開始にやや先行する事例であると言ってよいだろう。農業開発の初期の事例は一般に、以前から農耕がおこなわれていた地域であり、ここハラホリンもまたその一例に属す。

13世紀、フビライ・カン時代のカラコルム首都圏の屯田としては「和林」「昔宝赤八刺哈孫」「孔古烈（列）」の3ヶ所が知られており（白石ほか 2009：605）、そのうちの「和林」はカラコルムの音写で、現在のウブスハンガイ県ハラホリン郡に相当する。当時、開発された耕地の跡が、コロナ衛星写真によってオルホン川下流の扇状地面に広範囲に確認されている（相馬 2010）。跡地が確認されることからわかるように、すべての耕地が持続的に利用されてきたわけではない。しかし、当該地域の農業利用そのものは社会主義時代にまで踏襲された（小長谷 2010：24-25）。

社会主義時代には、灌漑水路がさらに整備され、小麦などの穀物のみならず野菜栽培なども積極的に試みられ、発電もおこなうなど、いわば総合地域開発のモデル地区として位置づけられ、1980年にはスタッフらが北極星勲章を受けた（小長谷・チョロフ 2013：20-21, 75-76）。

都市的施設についても継続的に利用されてきた。16世紀、モンゴル帝国時代の古都カラコルムの跡地に、アブダイ・ハーンの宮殿とエルデネゾー寺院が建設された。そもそも、古都カラコルムがそれ以前の遺跡を踏襲して利用されてきたことが、近年の発掘調査によって解明されつつある（Shiraishi 2011）。

エルデネゾー寺院は、多くの寺院からなる複合的な組織であり、それぞれジャスヤサンとよばれる資産をもち、周辺の遊牧民に家畜群を委託放牧したり、役人に金品を貸し付けたり、遠隔地との交易活動をしたり、経営体として機能していた（ハタンバートル、ナイガル 2012：90）。一方、寺院に属する僧侶たちは、他の寺院と同様に、出身別に部衆（アイマグ）を構成して、集住していた（ハタンバートル、ナイガル 2012：30）。このような経済的な機能中心を果たす集住地区という点では、人口は小規模ながらも都市

的な性格をもつ門前町である。1931年の調査によれば、「550人あまりの僧侶が修業生活を営み、60あまりの堂宇と30あまりのジャスを有し」ていた（ハタンバートル、ナイガル 2012：105）。その後の宗教弾圧政策によって放棄されたエルデネゾー寺院の堂宇建築物は、「近隣ソムの小学校や僧の手工業組合、共同商店、倉庫、病院、ソムの役所、草刈り局の住居として分与して移行し、また一部を建築資材として利用すること」（ハタンバートル、ナイガル 2012：110）になった。やがて、個々の建築物の多くは倒壊するものの、門前町の跡地は引き継がれて現在に至る（Chuluun, S. and T.I. Yuspova 2013）。

このように、ハラホリンは、農業および宗教の両面で、歴史的に持続的利用が確認されるという地域的な特徴をもっている。それゆえ、当該地域に住む人びとは、宗教や農業と密接な関わりをもつことが多い。そこで、2009年12月、社会主義時代にいかに信仰を維持していたか、という点に的をしぼって、男女3人にインタビューをおこなった。

インタビューを担当したルハグワテムチグは、短い滞在にもかかわらず、農業技師から民主化後に僧侶に転じたバダムレグゼンさん（1936年生まれ、以下敬称略）、ハラホリン国営農場で放牧を担当していたボルジゴンさん（1941年生まれ、以下敬称略）、ハラホリンの小麦工場で働いていたバダムハンドさん（1943年生まれ、以下敬称略）に遭遇することができた。

これまで、エルデネゾー寺院に関しては、50代の僧侶のインタビューがおこなわれたことがあるものの、宗教復興に焦点があてられたため、社会主義時代の生活については明らかではない（二木 2010）。これに対して、ルハグワテムチグによるインタビューでは、生業と信仰の双方すなわち当該地域の場合は農耕と寺院の双方が語られる。とりわけ、農業技師から僧侶に転じたバダムレグゼンは、「モンゴル国における寺院と農耕の親和性」（Konagaya 2011）をまさに体现する人物となっている。そもそも、モンゴル高原における伝統的な農耕は灌漑用の水を必要とし、一方、寺院のように人びとが集住する場合にも水場が必要である。すなわち、寺院と農耕は、双方の地理的必要条件が一致するうえに、たがいに需要と供給の関係にあるため、十分条件も一致するのである。

一般に、普通の人びとにライフヒストリーを語ってもらうというタイプのインタビューを実施するとき、イエス・ノーで答えることのできる質問をしてしまうと、返事がイエスもしくはノーで終わり、応答が途切れがちになる。かといって、単純に回答できない質問をしてしまうと、長々と語りがつづき、文脈が変化しつづける。今回のインタビューでは、聞き手のルハグワテムチグが具体的な過去の様子がうかがいあがってくるような質問を連続していくため、非常に充実した内容になっている。

インタビューを実施した直後、ルハグワテムチグは社会主義時代の宗教実践について以下の3点を指摘できると筆者への私信で述べた。

1) 僧侶たちは、還俗させられたのちに、結婚する場合と、結婚しない場合があり、いずれにせよ、各人で経文を唱えた。これらの行為は隠された。

2) 一般人は、人の誕生時の命名や、死亡時の葬式に際して、旧僧侶たちから助言を得ていた。また仏具類を隠しもっていた。

3) 高僧に関する社会的記憶は、魔力と結びついて現在も人びとの心にとどまっている。

一般に、1930年代後半、チベット仏教への弾圧が強化されてからというもの、民間における宗教実践は秘匿されたと考えられている。実際のところ、どのようにひそかに実践されたのであろうか。これについては、インタビューの中で、「深夜」「密封されたゲル（移動式住居）」などという表現が重複しているので、以下にその内容を確認しておく。〈 〉は筆者による見出しである。

〈深夜の読経〉バダムハンド

深夜に読経していたんだ。ツァガン・サル（旧正月）のあとには必ず年配の人びとを連れてきて、とっぷり夜がふけたあと、天窓の覆いを閉めて経をあげさせていたんだよ。天窓の覆いをしめなければ、人が入ってくるかもしれないから。そのように深夜そうやって経を読んでいたんだよ、声をひそめてね。

〈寺代わりの密閉ゲル〉ボルジゴン

深夜に扉を閉じて、柵の扉に鍵をかけ、ゲルの扉にも鍵をかけて灯明を灯し、そしてお香を焚く。そして読経して座るんだよ、彼らは。そしてその日に何を読むのか、彼らには読むべき定められたものがあつたんだろう。それは毎日読むべきもの、そういう師からもらつたそういう経典があつたようだよ。それを毎日読む。そして、それをすべて読むために、人が行き交わない、人びとの姿が消えた、休息している時間だから、それを読んでいたんだよ。うちのこのシャンハの寺にはその当時ラマ僧たちがまた日中の法要として毎日、法要を行う、常の法要というものがあつた。それはだいたい途切れることなく読経していたと、寺院を復興するときに、そのように話されていたよ。1つのゲルに入ってしまった、まったく途切れることはなかつたとね。それはとても驚くべきことだよ。そして彼らは、その宗教儀礼に使用する道具、仏や崇拜物などを、一般にこうしてたくさん残していたようだ。個人の物もたくさんあつただろう。仏のある家庭はたくさんあつたんだからね、そうだろう。その時の寺の物から取つて残した、繊細な神聖なものを取つて残したようだね。

〈秘密裏のオボーでの読経〉ボルジゴン

また秘密裏に読経させる、オボー（峠などにある土地神のよりしろ）などの上に行つては経典を読ませるんだよ。また家では「4人のラマ僧の食事、読経させて食事を供する」というものがあつたよ。宗教のそういう…4人のラマ僧に読経させる、そういうことをしていたんだよ。そういうことが一般におこなわれていたんだ。だいたいおこなわない年はない。ときにはシャンハの寺に行つておこなわせる。4人を集めて、ラマ僧を1つのゲルに集めて、読経して、そしてお供え物や何かを整えていた。それもまた秘密とするほかなかつたよ、党员だからね。一見革命家だったから。そうして、まあ党员として生きていたんだらうよ。だいたいそういうことだったんだ。

〈アルツ（お香）に対する認識〉バダムハンド

お清め？自分で清めるよ、誰かに頼んでするのはだめだっただろう。ちょうど子どもが入院しているとき、外からアルツを差し入れようとすると、シャンハの人たちはいつもこういうことをするといつてののしっていたものだよ、お清めをするといつて怒っていたんだよ。ゾル（子

どもの名前)が入院して、かなり後のことだよ、1年生になっていた、そのとき、知り合いの同郷のそういう当直、看護婦が当直をしているときに、アルツを入れないと、持ち込ませないんだよ。シャンハの人たちは信仰をしている、アルツを持ち込んだといってね。

最後の事例は後述する「文化躍進運動」と結びついている点で興味深い。宗教実践に関する要素として、たとえばオポー（土地神のよりしろ）、ボルハン（仏像）、フジ（線香）、アルツ（マツの芽の粉香）などが挙げられる。それらのうち、アルツは一般的に使用が認められていた。いわば消臭芳香剤として世俗化されていたと見てよいだろう。しかし、病院のように近代化をまさに象徴するような施設内では、アルツもまた忌避されるべき旧弊な存在と見られていたことがわかるエピソードである。些細な事例だが、うまく記憶から引き出され、当時の価値観を映し出している。

上述のように僧侶を招いて読経するのは、どのような場合なのだろうか。この点については以下のような証言によって確認することができる。ルハグワテムチグが指摘する命名や葬送のほか、病気や不調の悩みも引き受けられていたようである。

<秘密裏の読経>ボルジゴン

秘密裏に（僧侶だった人を）連れてきて読経させる。隠れて連れてきては相談をする。うまくいかないんだけど、私はどうなっているんでしょう、何がおこっているんでしょうなどということを探ねるんだよ、また、探ねようという人のところに行って、探ねる。相談する師があって当然だろうよ、そうだろう。それというのも、すべての人を洗脳して、その代わりに新しい脳にするわけではないんだから。みんなの中に信仰や崇拜といったものはずっと存在していたんだよ。

<秘密裏の相談>ボルジゴン

とても優れた人だと信仰のある人びとなどがよくやってくるんだ。田舎だから秘密だね、どこからでも関係なくこっちへ、もともとこちら側の丘を越えてやってくる。あちらこちらからたくさんやってくるんだ。主にこの東から多くやってくる。

<深夜の相談>バダムハンド

チーデレク（知人の名前）までも、ダワースレン（息子）が病気にときにはシャンハに行って僧侶に相談しようと、深夜に行ったもんだよ。かなり前のことだよ、それは。深夜相談して、もどってきたんだ。怖かったんだと、人に知れるのを恐れているんだとそう言っていた。シャンハに行って相談していた、そこには僧侶がいたんだよ。その土地の人間なら知っている、優れた人だということ。もしも世の中に知れたら、例の封建主義や何だといって、やられてしまうだろうよ。

<秘密裏の民間医療>ボルジゴン

医学が入ってきていた、もちろん入っていたよ。ソムの医者として準医師がいた。そしてだいたいはそのソムの医者が来るものだよ。それ以外にはまあチベット医療、伝統医療などを知っている人たちが何人か、そういうことをおこなっていたと思う。それはでも、明らかなものではなく、秘密で行うんだよ。もし知れたら民衆を惑わしたといわれるからね。そういうことだった。

<命名>ボルジゴン

ああ、(名前を) もらうよ。知識のある人のところにおこなってもらうんだ。それはまた聖者である昔からのラマ僧であった優れた人からもらうんだよ、人びとが優れているという人からもらうんだ。私の両親はもらっていた…たぶんそうだっただろう。またそれも好きなように自分たちで与えるものではないよ…。だいたい何々さんから名前をもらおう、誰々さんからお香を焚いて祈禱をしてもらって、そうしてもらおう。その人がもし時間があればやってきて、お香を焚いて祈禱をして、名前を与え、そして帰っていく。もしも来ることができないようならば、その人のゲルでお香を焚き、名前をもらって帰る。そうしていたよ。

<命名>バダムハンド

ほとんどは自らつける、でも、つけてもらうこともある、年配の人からもらっていたよ。秘密で訪ねて行ってもらう。うちの亡くなった夫の親戚だという、とても優れた僧侶だと言われていた人がいた。1地区にいたんだという。ダワースレン(子ども)の名前をその僧侶からもらったんだよ。アンジャー(僧侶の名前)のところにいきなさいと義母がね、さあ、おまえはアンジャーのところにいきなさい、夜に密かにいきなさい。そしてそのころ、60何年、62年だったかね、かなり夜が更けてからいきなさい。名前を聞いた朝の色になってね、聞き終わったときには、とても優れた人だったというよ。そしてその人から名前をもらったんだ。そして「ダワースレン」という名前をつけて、黄色い物で襦袢を作りなさいという、「さあ、このあとの子どもたちの名前はおまえが自分で名付けなさい。どんな曜日に生まれるか、その上にスレンという名前を加えて名付けなさい」とそう言っていたんだよ。

<葬送>ボルジゴン

秘密でね、行っていた。そういう習慣は捨てなかったよ。アルタン・サヴ(直訳すれば、金の容器という意味)を開く(埋葬方法について僧から指導を受けることを指す)、そして方向を定める、葬りに出立する日時などはそういう人を訪ねて聞くんだ。そしてシャンハへ行くんだよ。この地方の者は、オルホン川の北側に仏画家という1、2人のラマ僧から聞いていたんだろう。そして時にはシャンハへ行く。そうしていた。だいたいそのアルタン・サヴを開く、そのさまざまなことがおこると、普通の人間が考えて、あそこに葬ってしまうというようなことはありえないよ。必ず、そうした方がいい、その人のところに行ったほうがいい。必ずうかがいをたてて、その答えを得る、そういうものだったようだ。どうだったのかよくはわからないよ、でも人びとは好きなように葬儀などをしてはいなかっただろう。一般にアルタン・サヴを開かせると言っていたよ。そうしたんだと話していた。開く人びとをそこから、大きな寺院から探してきて、昔はそういう人がたくさんいたんだから。そうだろう。一部はできないというけれども、だいたい多くはそうできていたんだよ。その習慣は途切れてはいなかっただろうね。

<葬送>バダムハンド

開く人は減多にいなかったよ。1人の人が、シャンハにはたった1人の人が開いていたんだというよ。そしてその後、このあたりにも開く人がいたんだろうよ。いやほとんど開かせないんだよ、それからとても恐れる。そのアルタン・サヴを開かせに行くと、知られれば、それは許されないことだと言ってね。

ルハグワデムチグが指摘する3番めのポイントは、民主化後に宗教家に転じたバダムレグゼンの語りに集中的に現れている。ただし、指摘されている魔力(magical power)とは、おおむね負の力である。具体的には、モンゴル語でハラール *kharaal* と呼ばれる呪詛をさす。他の2人のインタビューには登場しない話題である。バダムレグゼンは一

方で、幼少期の体験談として、呪文を唱えたら狼が退散してくれたことを語っている。こうした体験がわざわざ語られることと、言語による魔力 (magical power of words) に対する意識が強いこととは心理的に呼応しているだろう。ただし、高僧の逸話が社会的に記憶される契機は他にもあるに違いない。今回のインタビューの事例で顕著になったのは、もっぱら呪詛の記憶であった。その詳細は本文テキストを参照されたい。

ハラホリンでのこのインタビューは、社会主義時代の宗教実践に焦点をあてるという原則とともに、それだけに限定することなく、ライフヒストリー全般を聞き取るという原則を維持して実施された。そのため、語りの内容は、宗教実践にとどまらない広がりをもっている。

3人はそれぞれ牧畜、農業、軽工業という異なる産業面で働いてきたため、それぞれの領域についての記憶を語っている。バダムハンドは、牧畜のなかでも、とくに女性として搾乳を担当していたため、これについて言及しているし、バダムレグゼンも農業技術者であったため当該地域の農業について詳しい。一方、ボルジゴンは兵役を終えたあと溶接工になったためか、アルテリという手工業生産組合について言及している。1930年代に処刑された高僧をのぞいて、一般の僧侶たちは手工業に配置転換されることによって労働力が確保された (モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988 : 375)。そうした歴史的経緯が、ハラホリンの地域性として彼の語りを通じて出現することになる。以下、牧畜、農業、軽工業と順次、特徴的な点を抜粋して確認しておこう。

<ハラホリン国営農場の家畜私有禁止>バダムハンド

最後には、78年だったかね、ここの国営農場が全部持ってってしまったんだよ。何にも残さずに持ってってしまったんだ。10頭の家畜さえも残さなかったんだよ。それはうちのこの国営農場以外の他の場所ではやらなかった、この国営農場だけがやった誤りだと私は思っているよ。そういうわけでこの私たちハラホリンの者たちというのは、疲弊してしまったんだよ、何頭かの家畜を少しでも多くしようというときに、また取り上げられて。

<搾乳労働>バダムハンド

そう、まだ星が出ていたよ、メスウシを搾ろうとするときは。そのネグデル (直訳すれば、統一という意味) 化運動 (牧畜民の社会主義的集団化を指す) が成功してからというものは、ザボ (原料を精製する工場) が乳を集めていたんだ。ザボの乳とって持って行く。メスウシを飼っている者たちを集めてね。乳を搾るために早く起きるんだよ、ひどかったよ。呼ばれて起こされて、起きあがる時は星が輝いていたよ、あちこちに星がね。こうして考えてみると、3時だろうか、4時くらいだったと思うよ。

<罪ある家畜>ボルジゴン

例をあげるなら、わが家、本当に生きた例としてわが家がある。祖母はかなり多数の家畜を持っていた家なんだよ、それが納める羊毛が不足したとする。割り当てられた羊毛はどうやっても到達できやしない。こうやって、裁判にかけられる。裁判所が呼び出して、そして判決を受ける。そして罰金を払い、そしてさらにその不足した羊毛を出せというんだ。それを払うことになった。こうやって何とかそれを納めるようにする。そして3頭の種牡馬があった、そこか

ら1頭（の種牡馬がひきいる群れ）を羊毛代として払ったんだ。

<自発的な考え>ボルジゴン

それで祖母とはいうと、さあこれらを政府に渡そう、ただで、もうやめよう、とにかく早く政府に渡してしまっ、苦しむのはやめようといってね。そうしているとシャンハにネグデルが作られた、そして、ホジルトにも作られるという。ではホジルトに行ってみよう、そのネグデルに入ろう。こうしてホジルトに行ってみたところ、そのソム行政は許可をくれないんだよ。そういう大変な目にあった。そして後になってからネグデルが作られて、56年にネグデルが作られて何頭かの家畜を渡して一息ついたんだよ。そういうことが起こった。

ボルジゴンの言及は、集団化過程における富裕な場合の普遍的な事例である。一方、バダムハンドの上記冒頭の言及は、国営農場の場合の特殊事情である。つぎに、以下は農業に関連する言及である。

<ハウス栽培>バダムレグゼン

そのレンツェン農場長が私を呼んで、「君はホジルトに行きなさい。専門の人を見つけてくれというんだ、君は適任だ」という。こうして私はホジルト温泉療養所に75年に行って、78年までホジルト温泉療養所で、65度の熱湯で5メートルの噴水を接続して、ガラスの温室を作って、そこでトマト、キュウリを栽培していたんだ、……私は医者のような白衣を着て、そして真っ赤なトマトやキュウリを持って、こうしてホテルに届ける、そういう仕事をしていた。

<囚人による農業>バダムレグゼン

いろいろな公的機関が野菜などさまざまなものを栽培しているとき、私は1200人服役していた刑務所、ハラホリン刑務所に、私は85年9月に刑務所の農業士として赴任した。こうしてたった1個のジャガイモを植えて食べることにすら知らない1200人の服役者のいるハラホリン刑務所にやってきたんだ。今でもそこはあるよ、でも私が定年になったあと、私のやっていたものは壊され、捨てられてしまったんだよ、だが、その痕跡はある。

囚人を国営農場で労働させるという行政措置は、たとえば、セレンゲ県のズーンハラー国営農場でも1937年に実施されている（小長谷・チョローン 2013：43，95）。農業の文化的位置づけが推察されるようなこの処置は、全国的に採用されていたことがわかる。さらに、以下は軽工業に関連する言及である。

<僧侶を労働者にするシステム、アルテリ（手工業生産組合）>ボルジゴン

ここの南シャンハの中心地、このあたりの定住地のシャンハ・ソムというのがね、南のシャンハというところに学校があったんだよ、うちのソムには。その寺院というのはソムの中心地にあった、かなり多くの家々もあったよ。それから私が学校にいたとき（1949-53年）は、アルテリ（協同組合）という1つの組織があった。一般に主な公的機関というとそのアルテリというものだったよ。そして、そのアルテリは、以前シャンハ寺院にいた僧侶たちに仕事を与えたんだ。そこではいろいろな鉄を使った製品を作る、木工品を作り、靴を作る。モンゴル靴、鞍褥、そしてだいたい日用品なんかを多く作っていたんだよ、アルテリというのはね。一般に国内の生産、今現在わが国で話されているところの、中小の生産工場という、それにあたるよ。物入れの大箱や容器、ゲルの木製部品、フェルトも作る。そういう組織だったんだよ。その後、

それを、ああしたんだ、ホジルト・ソムに移転させ、向こう側の「岩のアルテリ」というのと、それとうちのシャンハ・アルテリを統合して拡大させて、そして移転して行ってしまった。でも、そのあともこのソムはまだそのままあったんだよ。

<兵士が労働者になるというシステム>ボルジゴン

除隊になる若者たちはみんな建築現場で働いていた。とてもたくさんの若者が兵役に就いていたんだ。そして、その建築現場にいた若者たちはそのまま建築業に残る、そういう傾向だったようだ。そして、あちらこちらの建築分野へと就職していたんだ。工場や生産業へと就職していた。

<工場建設と人員募集>バダムハンド

この国营農場が作られて、その近辺の人びとを労働者にしたんだよ。遠く離れたゴチン（ゴチン・オス・ソム）やボグド（ソム）などから人びとを連れてきてね、労働者として働こうとやって来たんだ。遊牧民にしたり、トラクターの運転手にしたり、労働者として工場で働かせてね。

みんな若者だったよ、みんな私の同世代の若者たち。若い、20歳になったばかりの若者。

寺院、兵役、国营農場はそれぞれ異なる社会的文脈をもつにもかかわらず、社会主義的近代化の過程においては、技術労働者を養成する社会的揺籃すなわち一般人を技術者にする仕組みという点で共通した機能を果たしていることが了解されよう。

ところで、興味深いことに、このように3人はそれぞれ領域が異なるにもかかわらず、いずれも往時のいわゆる発展をそれほど肯定的に捉えているわけではないように見受けられる点で共通している。社会主義時代に、ひそかに宗教実践をおこなっていた人びとは、社会主義的近代化の発展路線に対して、ある種の距離感を持っており、そのことが反映されているのかもしれない。

これに対して、社会主義時代に展開された文化躍進運動については3人の評価は必ずしも一致しない。バダムレグゼンは経典回収に言及し、バダムハンドは衛生検査に言及し、ともに否定的に語るのに対して、ボルジゴンは総合的評価を肯定的に語る。教育という近代化の恩恵をほとんどの人びとが受けたため、社会全体としては評価が多様化するのかもしれない。以下に3者の文化躍進運動に関する言及を抜粋してみよう。

<経典の強制提出>バダムレグゼン

経典を持つ、仏教を信仰する家もなくなった。文化躍進運動の時代、すべてを持って行って、さあお前は仏を持っているか、経典を持っているか、と言ってね。特に党のメンバー、同盟のメンバーはというと、それを最も調べて、弾圧していたんだよ。なぜかというと、私は自分が青年同盟長をしていたから、このことを詳しく知っているんだよ。

<衛生検査>バダムハンド

文化躍進運動っていうのは本当にひどいもんだったよ、私たちをひどい目に合わせたもんだよ。文化躍進運動、3つの省の検査だといって。文化躍進運動がやってくるといって、3つの省の検査だといってね。

深夜、家に入ってきて調べるんだよ。その時代、不可という成績をつけられたら、どうしよう、

どうしようとはばかり思っていたよ。さすがに牢屋には入れないだろうけどね。

子どものおもちゃを置く一角、本の一角、本棚、衛生用品がなどと、ないものはないよ。そして、このゲルの柱から1つ1つノートがぶら下げられる。そして例の長、その地区の長や何かが入ってきて、調べるんだよ、1週間に2回は来なかったけれども。見て悪かったならば、そのノートに不可だと成績をつける、優や良ならば、良というふうにつける。……カーテンの棧などもこうやって拭いてみて、埃がついていたら不可だよ。

<文化躍進運動>ボルジゴン

それはまあ、遅れた状況からの脱出だよ。

私が小さい頃、私は祖父母と暮らしていたと話したろう。うちの祖父母の2人は結婚して最初に持ったゲル、それでずっと暮らしていたんだよ。それを新しくする、建て替えるというような考えはない。必要がないからね。建てることができている、暮らせている、とね。そして竈ではなく、昔ながらに火をそのまま燃やしていた、竈はないんだ。そうするとゲルは煙にまみれていて、煙にまみれ続けて、天井のオニ（屋根棒）などはねえ、例えば移動するときにオニをこうやって取り外す。そうすると煙のあれ（煤）が手にくっついてね、こうやってべちゃべちゃとくつつくんだよ。ずっと煙の中にあって、こんなに分厚くその汚れがくっついているんだよ。……そういうことから抜け出すために、それらを洗わせ、削らせてまた洗わせる、そしてできる者はペンキを塗る、余裕のある者は塗装するんだ。そしてそうやっているうちに、すべてを塗装するようになって、天井のツァヴァグはまた洗ってね、すこしきれいになって柔らかくなる。そうしているうちに清潔になっていく。そして内側の白い覆いの布をつけるようになる。外側にも白い覆いの布をつけるようになる。

一般に下着はつけなかったのを、下着のシャツを着るようになり、パンツをはいていなかったのをはくようにさせて…。そして布団には白いシーツをつけさせるようになって。私たちが文明化した活動だったんだよ、それは。大きな成果をもたらしたんだ。私たちはそのおかげでとても文化的になり、かなり清潔になった。その後60年代くらいまで続いたよ、その文化躍進運動は。

ここで文化躍進運動と試みに訳したモンゴル語は、ソヨリン・ドブトルゴー *soyolyn dobtolgoon* で直訳すると「文化の疾走」という意味である。ここに掲げた言及がしめすとおり、生活改善運動とでもいうべき政策であった。社会主義時代の正史（モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988）には、年代別の記述にくわえて1940年から65年までの文化や生活に関する変遷をまとめた章があり、「文化革命」の語がもちいられている（モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988（第2巻）：217）。しかし、ポスト社会主義時代の正史（MUSUATK 2003）では、当時のスローガンは紹介されなくなった（MUSUATK 2003：vol. 5）。作家として有名なバーバルの歴史書『モンゴル人たち——移動と定住』では、第11章「文化革命」の「生活文化の革命」の項目で言及されている（Baabar 2006：518-520）。人びとは、当該政策を、生活上の大きな変化として経験し、それらの経験が社会的記憶として蓄積されていると思われる。人びとの生活から近代化を捕捉しようとするとき、きわめて重要な側面であり、これを筆者自身の今後の課題として引き受けていきたい。

引用文献

日本語文献

相馬秀廣

2010 「農業とともに歩む」白石典之編『チンギス・カンの戒め——モンゴル草原と地球環境問題』
pp.184-197, 東京：同成社。

白石典之, 相馬秀廣, 加藤雄三, A. エンフトル

2009 「モンゴル国フンフレ遺跡群の調査とその意義——元代「孔古烈倉」の基礎的研究——」
『国立民族学博物館研究報告』33(4)：599-638。

小長谷有紀

2010 「モンゴルにおける農業開発史」『国立民族学博物館研究報告』35(1)：9-138。

N. ハタンバートル, Yo. ナイガル

2012 『エルデネ・ゾー史 (16-20世紀)』清水奈都紀訳, 京都：大谷大学文学部松川研究室。

二木博史

2010 「エルデニゾー寺院とその周辺——2010年現地調査報告——」『日本とモンゴル』45 (1)：46-60。

モンゴル科学アカデミー歴史研究所

1988 (1969) 『モンゴル史』(2冊本) 田中克彦監訳・二木博史ほか訳, 東京：恒文社。

日本語・モンゴル語文献

小長谷有紀・S. チョローン

2013 「モンゴル国営農場資料集」国立民族学博物館調査報告 SER110。

モンゴル語文献

Baabar

2006 *Mongolchuud: Nuudel, Suudal* (『モンゴル人たち：移動と定住』)。

Mongol Ulsyn Shinjlekh Ukhaany Akademi Tüükhiiin Khüreelel

2003 *Mongol Ulsyn Tüükh 5-r boti (XXzuun)*, UB, (『モンゴル国史』第5巻)。

Sodonomdagva, Ts.

1998 *Mongol ulsyn zasag, zakhirgaany zokhion baiguulaltyn ööchlölt shinechilelt (1991-1997)*, UB.
(『モンゴル国の行政区域変更 (1991-1997)』)。

モンゴル語・ロシア語文献

Chuluun, S. and T.I. Yuspova

2013 *Mongolyn Borkhan Shashiny Soyol: Khentii, Khangain süm, khiidiin sudral*, (『モンゴル仏教文化——ヘンテイ、ハンガイの寺院の研究』) 国立民族学博物館調査報告 SER113。

英語文献

Shiraishi, N.

2011 *Traces of life in the Uighur Period found beneath Erdene Zuu Monastery*, in Matsukawa, T. And A. Ochir (eds.) *The International Conference on “Erdene-Zuu: Past, Present and Future”*, pp.93-95, UB.

Konagaya, Y.

- 2011 The Affinity Between Lamaseries and Agriculture in Mongolia, in Matsukawa, T. And A. Ochir (eds.) *The International Conference on “Erdene-Zuu: Past, Present and Future”*, pp. 155-163, UB.